OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	犬と絶対無 ： 後期西田幾多郎における身体と自然
Author(s)	森野, 雄介
Citation	年報人間科学. 2016, 37, p. 105-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54577
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

犬と絶対無
――後期西田幾多郎における身体と自然

森野 雄介

要旨

本稿は、西田幾多郎の後期哲学における身体と自然の関係性を解明することを目的とする。後期西田の論文「人間的存在」において、身体と自然の関係性が「犬」への言及と共にクローズアップされる。その一文を手引きとして、本稿は後期の自然・身体概念と西田の前期・中期哲学とのあいだにどのような関係性が見受けられるかを考察していく。

はじめに、中期西田の主要概念である「永遠の今の自己限定」が後期では「自然」として捉え直されていることに着目する。さらに、そこでは、中期の「現在が過去未来を含む」という規定が「現在に過去未来が同時存在する」という規定へと変更されていることを確認できる。本稿は、この変更の理由に、後期において主観と客観の相互対立が議論の骨子となっていることを指摘する。

次に、主観と客観それぞれに対応するかたちで、西田が二種類の身体性と自然を提示していることを確認していく。まず、客観に対応するものが、「歴史的身体」と述べられる概念であり、これは静的な記号的「自然」として世界を観察可能にすることを確認する。主観に対応する身体性、自然として、西田は「生物的身体」と衝動的な「自然」を提示していることを確認する。

最後に、これまでの議論を踏まえて、論文「人間的存在」内の「犬」と自然に関する言及を再吟味する。

キーワード

西田幾多郎、身体、自然、歴史的身体、生物的身体

はじめに [1)]

本稿の目的は西田幾多郎 (1870-1945)の後期哲学[2)]における身体と自然の関係性の解明することにある。

西田の後期哲学は、前期や中期のものと比べ、現実における個の相互作用に強く定位する点に特徴がある。そこでは、前期・中期に見られた形而上学的な議論は背景に退き、個と個の関係が、「社会」「技術」「環境」という概念によって主題的に論じられていく。この転回は、おそらく戸坂潤 (1900-1945)や田辺元 (1885-1962)による批判を意識してのものであるだろう。両者の批判に共通する点は、西田の形而上学は観想的な性質を持つものであり、その理論によっては個の実践的な活動を適切に論じることができない、というものである[3)]。だが、西田はこの批判を念頭に置きつつも、そこから距離を取ろうとする。ここで、中期以前の形而上学的な議論が、どのように変化し、維持されているのか、という点が解明すべき問題となるだろう。

本稿は、この中期から後期への断絶と連続という問題に関して、『哲学論文集 第三』に収録された論文「人間的存在」の次の一文をその解明の手引きとする。

> [……] ドストイェフスキィは人間をその極限において見た。その消失点 (vanishing point) との関係において見たのである。ニーチェも人間をその極限において見た。しかし彼はドストイェフスキィと反対の立場から見たのである。上に論じた如く、作られて作るものの頂点として、人間は絶対の障壁に打ち当たる所に、真の人間があるのである。そこにはただ二つの途がある。ラスコーリニコフの如く神なくして生きるかという娼婦ソーニャに頭を下げて新しい生命に入るか、しからざれば「悪霊」の中のキリロフの言う如き人神への途である。ニーチェの超人の理想は正にそれである。しかし私は思う、彼の永劫回帰の思想は、超人の立場から彼自身が自ら越えることのできない深谷に臨んだことを示すものでなかろうか。侏儒は言う、すべて真直ぐなものは偽である、すべて真なるものは曲がっている時そのものが円である、と。永劫回帰の立場からは、超人もいつかは侏儒とならなければなるまい。月高く犬は吠ゆ (Vom Gesicht und Rätsel)。(9-55)

筆者の意見では、ここに中期から後期に通底するひとつの主題が暗示されている。

この引用では、ニーチェの「超人」概念が批判的に検討されている。このように述べられる理由として、上記引用に続く「どこまでも生命を繰り返そうとする生命肯定の偉大な意志の発現」によって乗りこることのできない不可能性に「人間」が直面している、という論点に求めることができるだろう (9-55)。そして、上記引用では、「人間」が直面する不可能性を告げるものが「犬」とされている。

もちろん、ここで「犬」に関する文章が現れる理由は、西田がニーチェの「ツァラトゥストゥラ」を念頭に置いているためであるだろう。「ツァラトゥストゥラ」が、「侏儒」と「瞬間」と「永遠」に関する問答を行うなかで、すべてが回帰するという着想を抱くきっかけとなるものが「犬」の吠える声であったためである。

だが私見では、ここで西田が「犬」という象徴に込めた意味合いはそれ以上のものがある。これは単なるエピソードに過ぎないが、書簡のなかで、西田は「月高く犬が吠ゆ」という上記の一文を、「主観的感情に捕われていた」可能性があるため「あれを消そうかとすら思った」と述べつつも、「心の底から出た語」としている (19-19)。つまり、上記の引用の「犬」は、西田の後期哲学の本質的な何かを示していると考えられるのではないか。

とはいえ、問題となるものは、ここで意志によって越えることのできない不可能性が、西田の体系上のどの概念と照応するかである。筆者の意見では、この不可能性と照応する「概念」が「自然」となる。上記の引用の後に西田は次のように述べる。

> 新しい生命を得るには、我々は再び創造的自然の懐に還らねばならない。そこから我々はまた新たな創造の力を得て来るのである、我々に新たな生命が生まれるのである。そこにはいつも抽象論理的に

は通約することのできない非合理な動物的なものが動いて出る。(9-58)

だが、この「創造的自然」とは具体的にはどのような概念であるのだろうか。本稿の問題は、次のものとなる。つまり、「犬」が吠えるとき、その「犬」がおいてある場所として何が相当するのか。そして、これまでに見たようにそこに後期の西田の「自然」概念が重ねられる。

さて以降では、この不可能性としての「自然」という論点を念頭に置きつつ、西田の後期哲学における「身体」と「自然」の連関を考察していきたい。おそらく、そのことによって、西田の哲学における、中期と後期との変化と連続を明らかにできるだろう。

本稿は次の手順で進む。まず、後期の「自然」概念と中期の形而上学が密接に連関するが、ある論点において変更が見受けられることを考察する。次に、その変更点をもとに、西田が二種類の身体性と「自然」概念を導出していることを確認する。最後に、それらを踏まえて、再び最初に引用した「超人」と「犬」に関する引用を考察したい。

第一節「永遠の今の自己限定」と「自然」

後期哲学における「自然」と「永遠の今の自己限定」

はじめに、西田の後期哲学での「自然」の位置を確認していきたい。これまで、論文「人間的存在」のなかで、「自然」が不可能性と重ね合わせられていることを見た。本節では、「自然」という論点が、論文「人間的存在」以前のテクストにおいて、どのように論じられているかを考察し、そこから中期と後期の関係性を明らかにしていきたい。

さて、「自然」という論点は、『哲学論文集 第一』(1935)以降に主題とされる。西田が「自然」という語で何を念頭に置いていたことは、この著作内の論文「世界の自己同一と連続」から捉えることができるだろう。そこでは「自然」が「現在」が強く結び付けられていることを確認できる。

> 行為的直観の世界は、現在が過去未来を含むのみならず、過去未来がこれに同時存在的なる世界でなければならない。しかしてそれが矛盾の統一として自己自身を限定して行く。私はそこに深き広き意味において自然というものが考えられる。真の自然の概念は現在が現在自身を限定すると言うことでなければならない、そこから無限に物が生まれると言うことでなければならない。ラティン語のナトゥラでも、ギリシャ語のピゥシスでも、そういう意味のものであったと思う。(8-83・強調筆者)

上記の文章の要点は「真の自然」が「現在が現在自身を限定する」という語で表現されていることにある。そして、それは「現在が現在自身を限定する」という語によって、現在と強く結びつけられていることが理解される。「自然」のこの規定は、おそらく重要であるだろう。なぜなら、この規定は、中期西田の形而上学の基盤である「永遠の今の自己限定」という概念の規定そのものであるためだ。

中期のテクスト『無の自覚的限定』(1932)での、概念「永遠の今の自己限定」の内実を簡潔に確認しておきたい。

> 行為と考えられるものにおいて、我々はいつも永遠の今と言うものに接しているのである、我々の行為はいつもそこから出立するのである。[……] 永遠の今の自己限定と考えられるものは、現在がどこまでも掴むことができないと考えられる如く、無限に深いもの、無限に到達するものでなければならない。しかもそれが永遠の今の自己限定として、現在が現在自身を限定するかぎり、すなわち現在が掴み得られるかぎり、それが行為の意義を有し、非合理なるものの合理化として自己というものが見られるのである。(6-133・強調筆者)

上記引用では、個の自己意識と行為が、対象化に先立つという意味で底のない世界である「永遠の今」(もしくは「絶対無」) が「現在」に収斂する作用が存在することが主張されている。

中期の西田の代表的な主張は次のものと言えるだろう。それは、「過去」から「未来」への直線的に連続する時間系列の認識が、つねに「現在」から為されること。そして、その「現在」とは、認識によって構成されるのではなく、行為のなかで成立するものであること。そのような個が行為可能な「現在」を成立させる「現在」の自己組織化は、先対象的である「現在」が対象的な「現在」へと固定されることで成り立つこと、である。そして、そこでの先対象的な「現在」は、明確な規定を逃れさるため、「永遠の今」もしくは「絶対無」という語で表現される。

言い換えれば、「永遠の今の自己限定」という語では、連続する時間の系列の外部にある先対象的な「現在」(「永遠の今」ないし「絶対無」) が「瞬間」に映り込むことで、個物の自己意識と、その個物が行為可能となる「現在」が産出されることが示されている。そして、中期では、そのような永遠性の瞬間への映り込みが、「現在が現在自身を限定する」という語で示されていた。

これを踏まえて、『哲学論文集第一』内の「自然」が「現在が現在自身を限定する」と規定されていた一文の考察へ戻りたい。すなわち、後期においては、「永遠の今の自己限定」が、断続的に自己を生産する「自然」として示されている。

だが、さらに問題となる点は、その引用内で「自然」が「現在が過去未来を含むのみならず、過去未来がこれに同時存在的なる世界」と規定されていることである。筆者は、この一文に中期と後期の差異を見て取りたい。すなわち、「現在が過去未来を含む」立場が中期のものであり、ここで焦点が当てられるものは、「現在」の現れにおいて、〈現にあるもの〉と過去未来など〈現にはないもの〉[4]が識別不可能に交錯していることである。

他方で、「過去未来がこれに同時存在的」であるという論点が後期のものである。ここで焦点が当てられていることは、「現在」に存在する個物が行為する際には、過去未来など〈現にはない〉ものと関係する場が存在する、ということである。

この変更には何が意図されているのだろうか。私見では、ここに田辺と戸坂の批判が影響している。代

表的なものとして、田辺の論文「種の論理と世界図式」のなかの次の一文を挙げられるだろう。「それ[西田の形而上学]が種を無視する個の立場なることは明白である。[……]これは無の限定の立場からの宗教的観想に外ならない」(田辺元『田辺元全集』第六巻、筑摩書房、1963、p. 202)。ここでの田辺の批判の要点は、西田があまりにも「個」もしくは「類」の立場によりすぎているものであり、「種」の規定を踏まえて歴史的な実践を記述することができないこと、いわば「社会」などへの視野がそこでは欠けてしまっている点に向けられたものである。

ここから、西田が「永遠の今の自己限定」としての「自然」を、「過去未来を含む」立場ではなく「過去未来が同時存在的」な立場と表現した理由が推測される。つまり、西田はあくまで「自己」の根底には、先対象的な現在(「永遠の今」)が個的な「現在」へと収斂する運動が存在することは撤回しない。だが、後期では、個的な現在からどのように他の個物へと通路を持つかが問題とされる。そのため、西田は、田辺が「種」と読んだものの重要性を認めるとともに、それを〈現にはないもの〉が保持される領野、つまり「過去未来」が同時存在する領野に求めようとする。

そして、そのような変更を受け取る概念が、西田の後期哲学における「自然」である。それは、中期の「永遠の今の自己限定」を受け取るとともに、個と個の行為を可能とする〈現にはないもの〉が同時存在する領野として再提示される。とはいえ、私見では、後期の西田は「自然」が個物と個物の底が共通するという中期には存在しなかった前提を加えている。中期では、それは注意深く避けられている。それは、個物と他の個物は絶対的に異なった世界を持つ、という論点であり、ここに中期の積極性を認めることもできるだろう (6-167)。

「自然」における二元性

ここまで、後期の「自然」概念が、中期の「永遠の今の自己限定」と同様の規定が為されているとともに、「過去未来を含む」のではなく「過去未来が同時存在的」な領野であると変更されていることを見た。

そして、この「過去未来が同時存在的」という論点が、個と個の関係性を説明するものとなるために、西田が新たな規定を加えることを見ておきたい。「過去未来が同時存在的」であるという論点に注目しながら、『哲学論文集 第二』(1937)の次の一文を考察してみたい。

> 現在は絶えず動き行くものでありながら、いつも現在である。それは時間空間の矛盾的自己同一として、永遠の今の自己限定と考えられる世界であり、現在において無限の過去未来が同時存在的な世界であるのである。(8-510)

ここには、これまでに確認した「永遠の今の自己限定」としての自己生産的な「自然」が念頭に置かれている。それは、「現在において無限の過去未来が同時存在的な世界」と述べられている。さらに加えられた論点として、ここに見いだすことができるものは、そのような「真の自然」が「矛盾的自己同一」と述べられていることである。

ここで、後期の西田が多義的に用いる「矛盾的自己同一」という語が「自然」に当てはめられていることに難しさを感じる方もおられるかもしれない。だが私見では、この語に対して念頭に置くべきことは限られている。

第一に念頭に置くべきは、この「矛盾的自己同一」という語によって模索されていることが、西田自身の前期哲学の乗り越えである、という点である。前期の西田は「主客未分」の立場を強く主張していたのに対して、後期は「主観と客観とはどこまでも相反する」ことを主張する (8-128)。そして、そのように相反する主観と客観が、一方が主で他方が従となるのではなく、相互に独立したものとして協働することが主張される。つまり、後期の西田は相異なる主観と客観という論点から、経験の成り立ちを考察する立場を取る。そして、上記引用の「時間と空間の矛盾的自己同一」とは、主観と客観の対立を別のパースペクティブから眺めたもの表現である (8-18)。

さて、本稿にとって重要である論点は次のものである。それは、後期の自然概念が相互に独立した二元性によって引き裂かれていることが、上記の引用で確認されることである。

すなわち、後期の「自然」概念は、中期の「永遠の今の自己限定」を引き継ぐものである。そして、次の二点が変更される。まず、「現在」が「過去未来を含む」のではなく、「過去未来が同時存在」する場所とされたこと。そして、その自然が「主観」と「客観」の二元性に由来する「時間空間」の二元性のもとに分けられていること、である。

ここから、後期における「永遠の今」としての自己生産的な「自然」概念は、「主観」と「客観」の二つの方向に分たれていることが予想できる。

そして、後期においては、この「主観」と「客観」の断絶という論点から「身体」概念が捉え直される。次節では、後期西田の身体論と「自然」との連関を考察していく。

第二節 後期西田における「身体」

それでは、後期の西田の身体論を確認していこう。後期の西田の身体論には、大きく分けて二つの系列が存在する。

まず、「客観」の側に属する身体性。これは、「人間の身体は生物的身体と同様には考えられない」と述べられるような (8-293)、人間と動物の身体的な差異を強調する立場であり、「歴史的身体」という語で提示される。

他方で、「主観」の側に属する身体性。これは、「人間となっても、我々は動物性を脱するのではない」とするような (9-163)、あくまで人間が動物的な身体性を脱しないことを強調する立場であり、「生物的身体」という語で提示される。

第二節では、上記の二つの立場に属する身体論それぞれを確認し、それぞれと「自然」との関係性を考察する。

「歴史的身体」と「記号的表現面」としての「自然」

それでは、「客観」の側に対応する「歴史的身体」という概念の内実を確認していきたい。『哲学論文集第二』では、この「歴史的身体」の特性が、「技術的」であることされる。

> 動物はただ身体的存在である。しかし人間は身体的存在たるのみならず、身体を道具としてもつ。道具は物でなければならない [……]。物としてどこまでも自己に立つもの、自己の生物的身体に対しては死の世界に属するものが、自己の身体と一であるところに、人間的身体があるのである。[……] かく身体と物と結合するものが技術である。 (8-293)

この文章での人間の身体が「歴史的身体」に相当する。そして、その特徴とは自己の生命に対しては「死の世界」に属する「物」と「結合」することであり、「物」との結合の様式が「技術」とされている。そして、「技術」を持つことが人間の特性とされている。

それでは、後期の西田は「技術」という語で具体的には何を意図しているのだろうか。この点を次に確認していきたい。

まず、「技術」という語に関してだが、西田は「道具の制作」を念頭に置いている。彼によれば、人間と動物の間には本性的な差異が存在する (8-277)。動物は身体的動作の延長としてのみ道具を使用できるが、人間は「道具」の使用とともに「自己の動作を客観的に映す」ことが可能であるとされる。だが、どのような理由で、ここで「道具」と「客観的な映し」が結び付けられているのだろうか。この論点に関して、『哲学論文集 第七』(1946) の次の文章が手引きとなるだろう[5)]。

> 我々は最始、我々の身体的機関にならって道具を作った。梯子とか振子とかいう道具は、垂れ下がる手から名づけられた。しかし道具の発達完成するに従って、逆に道具の状態、目的、使用から我々の身体の肢節的組織が理解せられるに至った。関節の記述に多くの機械の名が取り入れられてきた。我々が眼を外に射影して作った機械から眼の生理的秘密が理解せられる。カメラ・オブスクラと言うものなくして、眼の構造は理解せられないであろう。耳の構造もオルガンから理解せられる。神経は電信機から理解せられる。機械から我々の有機体が理解せられるのである。生理現象は直接に内から理解せられるのでなく、かえって機械装置の助によって実験的に理解せられるのである。(11-295)

つまり、「道具の制作」および「道具」を持つことによってなされる行為とは「身体」を「道具」に基づいて外界へ投影することを意味する。ここで把握される「外界」とは、「実験」という特徴を持つ行為によって見いだされるものである。そして、その「外界」は、生物的な身体性とは異なった特徴を持つ。それは、同じものが繰り返すという静的な秩序を持つものとして認識される点に特徴があり、さらに、そのように見いだされた「物の世界」の秩序に従うかたちで、自己の身体が再把握される。

つまり、後期西田が主張することは、「道具」の制作と使用には、自己の動作の「客観的な映し」が必

要とされることである。この「客観的な映し」とは、自己の身体と異なるものとして「物」を認識することによって可能となる。そして、この客観的な映しによって、自然はある相のもとに現れる。『哲学論文集 第一』では、客観的なものとして見いだされる「自然」が「必然的自然」という語で提示される。

> 自然を単なる必然と考えるのはむしろ近世科学の考というべきであろう。しかし科学的自然の根底にも、物が生ずるということがなければならない。さきに言った如く、同一の世代が繰り返されるということによって、必然的自然の如きものが考えられるのである。 (8-83)

すなわち、身体の延長としてではなく、身体を拡張するものとして「道具」が制作され、使用されるとき、「自然」は、物の生産の規定ではなく、同一の世代を繰り返す秩序を持つ「必然的自然」として見いだされる。

上記の「必然的自然」がより深く考察される論文が『哲学的論文集 第五』(1944)所収の論文「知識の客観性について」である。

この論文で主張されることは、道具の制作を導く

西田は「我が物を作るには、[……]身体と言うものそのものが、すでにこの世界から生成したものでなければならない。言わば自然の技術によって作られたものである」と述べている (10-352)。

つまり、人間が「自然」を客観的な視を伴った「必然的自然」として見いだすことは、すでに「自然」が自らを「技術的」に規定することから可能となる。では、そのような「自然」の技術的な規定とは、具体的にはどのようなものか。少し時期はまたぐが、『哲学論文集 第五』(1944)以降にこの問題がより綿密に吟味されることとなる。

> [……] 私は、空間と言うのは、その根本的性質から、一般的に記号的表現面と考えたいと思う。[……] モナドが世界を映すことは、逆にその一観点となることである。かかる個物的自己の逆限定の方向において、いわば絶対現在の自己否定面において、我々の自己は、もはや映すと言うことをも失って、世界の自己表現の単なる記号となる。数の世界と言うのは、かかる意味において矛盾的自己同一的世界の形式的な、言わば純記号的なる自己表現の世界と言うことができるだろう。(10-429)

ここで身体が相対する「客観」の方向に見られる「物」の現れを支える世界が「記号的表現面」としての「空間」として提示されている。「自己」を他と断絶した個として認識するのではなく、時間を越えた「純なる記号」を支える場としての自然のなかに存在していることの発見が、人間のみに可能なことである。

そのような自己の認識は、『哲学論文集 第二』では次のように論じられている。

> 現実の立場において、絶対静を背景として世界を見る時、それが認識対象界である。無限の過去未来にわたる世界を、現在において同時存在的立場において見るのである。全世界を空間的に見るのである、過去として見るのである。 (8-437)

ここでは、対象を欲求の対象としてではなく、認識の対象として把握することが、過去未来にわたる世界を「ひとつの平面に映すこと」によって可能となるとされている。上記の引用では、自己とは異なる「物」を静的に認識することは、すべての秩序を生成し終わったものとして眺めることであり、それが「現在において同時存在的に見る」ことと述べられている。

後期西田によれば、動物には不可能であり、人間にのみ可能であることとは、道具の制作のなかで、行為的に静的な「物」を認識すること、「自己」を「自然」のなかの「記号」として認識する俯瞰的な把握である。そして、自己の身体を通じて、自己とは異なるものとして「物」を静的に把握することによって可能となるものであり、その静的な把握は「自然」が現にあるものを「過去未来が同時存在的」な場に通路を持つものとして規定することに支えられている。

> 我々は時の現在においていつも時を越えたものに触れているのである、時を越えたものにおいてあるのである。ここに所謂形というものの成立する所以のものがあるのである。現実の形というものもそこから定まるのみならず、色々の映像という如きものもそこから成立するのである。(8-429)

ここからこのように言えるだろう。客観的な外界への投影によって身体的に見いだされる「自然」の「記号的表現面」とは、現にある形のなかに映り込んでいる「時を越えたもの」としての「秩序」の領野である。それは、個が二度と現れることのない個として成立することを可能とするものであり、そのような場を行為の客観的な秩序として見いだした身体性のことが「歴史的身体」という語で表現される。そして、「歴史的身体」が、現在における行為のなかで不変的な秩序を見いだすことは、自然が生産する「形」を、不変的であり記号的なものとして生産する、という論点によって可能となる。「歴史的身体」とは、客観的な「物」に対応する身体性であり、それは時を越えた秩序の領野である「記号的表現面」としての「自然」へと開かれた身体性である。

さて、一旦これまでに論じた「歴史的身体」と「自然」の関係性を整理したい。

まず、「道具」の制作と使用によって、「身体」を客観的な秩序を持つ「外界」へと投影し、再把握することを確認した。次に、そのような外界と身体の把握が、「客観的な映し」を伴うことを見た。そして、そのような「客観的な映し」は、「自然」がという中期の「永遠の今の自己限定」を背景に持つ「自然」の「時を越えた」な領野へと通路を持ち、自らをその場において再把握することによって可能となることをみた。そのような「自然」とは、記号的に自らを規定する「自然」として現れる。

だが、本稿のはじめに引用した論文「人間的存在」の「犬」と「超人」に関する引用の直前の文章では、客観的な視がある危険性を持つものとして論じられている。

> 作るものの方向において作られたものを越えれば、ただ抽象論理の世界あるのみである。それは亡び行く方向である。(9-34)

すなわち、現にある「物」を踏み越えて、記号的に自らを規定する自然の持つ過去未来が同時存在する領野にのみ通路を持つ在り方が、ここで批判されている。ここには、「客観的な映し」が過度なものとなれば、すべての特性を抹消してしまう見方にも成り得ることが、念頭に置かれているだろう。それでは、自然の持つ超時間的な秩序とともに、私たちは何に通路を持つべきであると西田は考えているのだろうか。

それを確認するために、これまでに見た「客観」と対応する「歴史的身体」とは異なる身体性である「主観」に対応する「生物的身体」を確認していきたい。

第三節　後期西田における「生物的身体」と「衝動的」な自然

これまで、後期西田の二つの身体論のうちの一方である「歴史的身体」に関する議論を確認してきた。次に、後期西田の身体論のうち、「主観」に対応する人間の身体の動物性を強調する議論系列を確認していきたい。

「生物的身体」と「衝動」

さて、後期西田において「主観」に対応する「生物的身体」は、動物の身体に対応する。

まず、『哲学論文集 第三』における、後期西田の動物に対する考察を確認しよう。代表的なものとして、西田は動物の生を人間よりも「衝動的」なものとして規定する (9-176)。その理由は上記で確認したように、「動物」は道具の代用可能性に導かれた「客観的な映し」によって、「過去未来が同時存在的」な領野において、自己を再把握できないために「自然」の持つ自己形成作用を秩序的に把握できないことを意味する。

つまり、「自然」の持つ秩序を認識し、その認識とともに行為することが不可能であるため、「自然」の断続的な自己形成作用に対して「客観的な映し」によって距離を取り、行為できない(9-47)。つまり、動物は、断続的に生成する「自然」に秩序を見いだすことができないため、連続して生成する「衝動」から距離を取ることができないとされている。

だが同時に、西田によれば、人間はある種の「動物性」を脱することが出来ない。彼の言葉を借りれば、「我々の日常生活と言っても、肉体的には動物的である、精神的と言っても大体は因習的たるに過ぎない」(9-48)。つまり、後期西田によれば、人間は「動物的な衝動」を脱することができないし、また、人間の特質を動物と区別される何らかの精神性に求めることができないことを主張する。

では、動物と区別される「人間」の立場はどのように形成されるのだろうか。西田は「人間は動物を対極としてもつことによって人間である」と述べる (9-48)。つまり、彼によれば、人間と動物の距離とは、行為に先立って前提されているのではなく、行為のなかの「客観的な映し」によって、その都度ごとに形成されていくものであり、形成されるべきものである。

だが、行為のなかで人間が動物性から距離を取る以前に、人間を取り巻く「自然」とは、どのようなものが意図されているのだろうか。そして、そこに中期の形而上学的な概念を引き継ぐ後期の「自然」に関する議論は関連するのだろうか。これを分析するには、これらの議論が形成されていく途上である『哲学の根本問題』及び『哲学の根本問題 続編』の記述が手引きとなるだろう。そして、それらを掘り下げて

いくことによって、後期西田の「自然」概念の別の側面を見いだすことができるだろう。これらを念頭に置きながら、後期西田における「衝動」概念を考察していきたい。

「経験の起始」としての「衝動」

これまでに、「人間」は動物と絶対的な差異を前提的に持つのではなく、それらは行為のなかで形成されるという論点を確認した。そして、その「人間」がある種の動物性を脱することができない、という論点は、人間もまた「衝動的」であるという論点に根をもつ。

筆者の意見では、後期西田を考えるとき、この「人間」も「衝動」を脱することができない、という論点は重要なものである。なぜならば、後期の西田は一貫して「衝動」概念を経験の起始として捉えているためである。まず、『哲学論文集 第三』では、西田は次のように述べている。

> 我々の行動は最初衝動的に起こるのである。物を見るから起こるのである、物によって呼び起こされるのである。どこまで言っても、我々の行動はかかる性質を脱することはできないのである。しからざれば、単なる抽象的観念に過ぎない。(9-240)

そして、筆者の見立てが正しければ、この論点は西田の後期思想の開始から一貫したものと言えるだろう。たとえば、『哲学の根本問題 続編』(1934)において「直接の世界はまず衝動的と考えられなければならない」とされることからも、それが確認できるだろう (7-378)。

だが、行為の開始が動物的な「衝動」として、一貫して措定されているとしても、それは後期西田の他の重要な議論とはたして関連を持つものなのだろうか、という意見も考えられる。これに対して、筆者は、むしろ西田の「衝動」概念は、後期の形而上学的側面を代表する「自然」と密接に関連を持つ概念であり、この論点を掘り下げることで、さらに西田本人が暗示するに留めた側面を明るみに出すことができると考えている。

ここで、便宜的に後期西田の「衝動」概念に対してある区分を設けたい。それは、〈水平的な衝動〉と〈垂直的な衝動〉という区分である。もちろん、これは西田自身がテクスト内で明示するものではない。だが私見では、「衝動」概念に関して、この二つの区分が後期の西田のテクストには混在しており、これを明確に区分けすることによって、後期西田の新たな側面を提示できると思われることが理由である。また、ここでの〈水平的〉、〈垂直的〉という区分は、前者が時間系列上におけるものであり、後者が時間系列外に由来するという点を念頭に置いている。

さて〈水平的な衝動〉とは、上記で確認した連続して生成する「自然」の自己規定から距離を取ることができない「動物」の特性とされる「衝動」である。もしくは時間上において連続する感性的、パトス的な衝動である。

この〈水平的な衝動〉に対して、〈垂直的な衝動〉とは、「瞬間」的な永遠性が個的な「現在」へと映り込む活動である「永遠の今の自己限定」に比されるものである。そして、それは先取っていえば、ロゴス

—パトス的なもの、もしくは記号—衝動的なものであると言えるだろう。そして、第二節で確認した秩序において自らを規定する「記号的」な「自然」とは異なった発現の仕方をする「自然」に根ざすものである。

それでは、以降で〈水平的な衝動〉、〈垂直的な衝動〉と「自然」との連関を探っていきたい。

「自然」—「衝動」—「構想力」

まず、連続的であるという性質を持つ感性的な〈水平的な衝動〉と対置される後期西田における〈垂直的な衝動〉に関して考察していこう。後期西田において、衝動が時間的な系列の外に根を持つことが提示にされるテクストが『哲学の根本問題 続編』である。ここで、西田は「衝動」に関して次のように述べている。

> 衝動と考えられるものが我々の自己を否定すると共に肯定する意味をもって、場所の自己限定と考えられる。思惟というのはかかる否定の極限において考えられるものである、すなわち衝動的限定においてその否定を極大となし肯定を極小としたものである [……]。(7-374)

ここでは、「衝動」が「場所の自己限定」であり、さらにそれが思惟を可能にする原理であることが論じられている。つまり、〈垂直的な衝動〉とは、思惟と感性という区分にあてはまらない「衝動」である。そして、このような場所の自己限定としての「衝動」は、原的には「永遠の今の自己限定」に根を持つと考えられていることが、次の一文から理解できる。

> 真の生命は衝動的なる現実の生命から考えられねばならない、衝動の底に見られる暗いものというのは、[……] 永遠の今の自己限定面という如きものでなければならない。それは中心なき円の中心という如きものでなければならない。 (7-284)

ここでは、「衝動」の底に見られるものが「永遠の今の自己限定面」であるとされている。ようするに、行為の開始となる動物的な衝動は、それが時間的系列の外に由来するという意味において、垂直的な側面を持つ。さて、上記の一文では個的な「現在」において捉え直された垂直的な「衝動」の底が「永遠の今の自己限定面」と呼ばれていた。では、捉え直される以前の成立の最中にある「衝動」はどのようなものであるのだろうか。それは、「永遠の今の自己限定」そのものであると言えるのではないか。これは筆者の解釈に過ぎないが、この読みを裏付ける一文として、次のものを挙げることができる。

> [……] 衝動というのは単に我々の意識的自己から起こると考えることもできない、また単に物質から起こると考えることもできない。衝動というものが考えられるかぎり右の如く考えられねばならない。しかして衝動というものなくして我々の自己の存在というものは考えられないのである。
>
> 絶対の否定即肯定として弁証法的に自己自身を限定する世界の自己限定が、右に言った如き意味にお

いて衝動的と考えられるならば、我々の行為と考えられるものは宇宙的衝動によって基礎付けられると考えられなければならない。そこに無限なる魂の世界というものが考えられる、無限なる夢の世界というものが考えられる。そこから種々なる心像という如きものが見られるのである。(7-374)

筆者の見立てでは、ここで〈水平的な衝動〉と異なる〈垂直的な衝動〉が語られている。そして、「衝動というものなくして我々の自己の存在というものは考えられない」という論点は、中期の自己の根底としての「永遠の今の自己限定」という論点と重ねることが可能であるだろう。上記著作では、「永遠の今の自己限定」としての個的な現在の成立が「衝動」として論じられる。

だが、上記の引用にはさらに以下の論点が結びつけられている。それは、そのような垂直的な「宇宙的衝動」が「無限なる夢の世界」を生産するものであり、それによって種々の「イメージ」を見ることが可能となるとされている点である。

筆者の意見では、ここに現れているものは、記号的な「自然」とは異なる「自然」である。そして、それは「物」の静的な認識を伴わない際に現れるものであるために、「動物」の特性と置かれるものである。なぜなら、この「イメージの世界」に存在することが「動物」の特性とされるためである。

直接の世界はまず衝動的と考えられるものでなければならない。動物の世界というものは然るものであろう。衝動は自己矛盾である、そこには既に内と外との対立がなければならない。しかし動物はなお内というものをもたない、従って外部知覚的なるものももたない。故に動物は現実に物を見るということはない。動物は客観界というものをもたない、世界というものをもたない。動物の世界は夢の世界である。動物は物の代わりにただ心像をもつ。心像が動物の世界の物であるということもできるであろう。(7-379)

つまり、「物」「客観」と対応する「外」の認識を持たない際に、「自然」はイメージを生産するものとして現れることがここで示されている。つまり、動物的な身体性（生物的身体）に現れる「自然」とは、イメージを生産するものであり、それは現実と現実でないものの区分が失われている「夢の世界」とされる。

すなわち、後期西田において「永遠の今の自己限定」と重ねられる〈垂直的な衝動〉とは、「客観的な映し」を行わない場合、「現在」において現実と非現実の区別が失われたかたちで浮動する無数の衝動的なイメージを生産する場として現れる。だが、人間も動物と同じく、行為を「衝動」から開始する。すなわち、後期西田において「自然」は、一度目は衝動的な「自然」として現れ、「物」と対応する「客観的な映し」によって観察される場合、秩序を持つ記号的な「自然」として現れる。また、「動物」が観察するという特性から、衝動的な「自然」として見いだされるものを、水平的な〈衝動〉の根幹と考えることができるだろう。なぜなら、それのみでは「衝動」が「思惟の原理でもある」と述べられていた文脈から外れるためである。すなわち、それら双方の「自然」は現在における垂直的な衝動に根を持つ。

本稿が、イメージを生産する衝動的な場を「自然」という語で提示するのは、本稿のはじめに確認した

ように『哲学論文集 第三』において、「自然」が「抽象論理的には通約することのできない動物的なものが動いて出る」場として提示されていたためである (9-58)。

すなわち、「客観的な映し」を伴う道具を用いた行為によってみいだされる以前の「自然」とは、無数のイメージを生産する場所としての「自然」である。そして、それが動物的な身体性である「生物的身体」が対峙する衝動としての「自然」である。そして、そのような「生物的身体」の特性は、中期のある論点を引き継ぐものであることを簡潔に確認しておきたい。中期著作『一般者の自覚的体系』(1930) では、「身体」の性質が次のように提示されていた。

> 元来、我々が想像的映像と考えるものが、我々の身体の本質をなすものであり、夢において現れる種々の映像も我々の身体にほかならない。(5-282)

筆者の意見では、動物的な身体が「イメージの世界」としての自然に根を持つという議論はこの論点を引き継いでいる。後期の西田の述べる「生物的身体」は、イメージをその本質とするものである。

すなわち、後期の西田において「永遠の今の自己限定」としての「自然」は異なった二つの側面を持つ。すでに、「主観と客観とはどこまでも相反するものでなければならない」と後期のテクストで述べられていることは確認した (8-128)。そして、この「主観」に対応する「生物的身体」が見いだす「自然」が、イメージを生産し続ける場としての「衝動的」な「自然」である。これに対して、「客観」に対応する「歴史的身体」が見いだす「自然」が、前節で確認した「記号的」な「自然」である。ここから後期の西田が、認識の下部に行為の領野を置く理由が把握できるだろう。つまり、人間の意識とは、自己の動物的な身体性と記号的な身体性のあいだの揺動によって形成されるものであり、それらの身体性は「衝動」と「客観的な映し」の種類の異なる行為における見ることに連関する。そして、それら双方は出自を確定できない永遠の今の自己限定としての〈垂直的な衝動〉に根を持つ。

〈垂直的な衝動〉とは、一方ではイメージの世界に根ざしながらも、同時に「思惟」を可能にする原理である。それはロゴス—パトス的なもの、もしくは「自然」に対応させ述べると、記号—衝動的なものと言えるだろう。

さて、最後に考えたいことは、そのような〈垂直的な衝動〉には対応する「自然」が存在するのかどうか、という論点である。一方では「自然」による現在の「形」の生産は、それが認識を逃れ去るものであるという性質から、西田はそれを「無」と提示するだろう。だが、おそらく〈水平的な衝動〉を生産する衝動的な自然から「客観的な映し」を可能とする記号的な自然の媒介の過程に、西田は別種の「自然」が存在することを『哲学論文集 第三』において暗示している。

> 矛盾的自己同一として作られたものから作るものへというのが、構想作用の立場である。具体的知識は構想作用的に構成せられたものである。 (9-139)

つまり、ここで「絶対に相反する」とされていたはずの「矛盾的自己同一」を繋ぐ媒介者として、「構想作用」

つまり「構想力」が採用されている。だが、西田の場合、「構想力」とは何に由来するものであるのか。

筆者の意見では、おそらくここに三木清の『構想力の論理』の西田への強い影響が見受けられる。すなわち、「形」を産出するものとしての「構想力」としての「自然」という論点である。そして、後期の西田のテクストにおいてイメージの世界に属する「想像」と「構想作用」は別の概念に位置づけられると筆者は考えている。もちろん、構想力を「自然」の根幹に置く立場を西田は否定しているが (10-354)、私見では、構想力による媒介という論点に関しては、三木の議論を採用している。さらに、「形」の生産という論点に関しては、より強い影響が見いだせるだろう。

すなわち、後期の西田は「生物的身体」に対応する衝動的・イメージ的な自然、「歴史的身体」に対応する記号的な「自然」とともに、「構想力」としての「自然」という概念を保持しているのではないか。とはいえ、紙幅の都合上、本稿で上記の問題を十分に扱うことは出来ないため、これは筆者の次の課題としたい。

結論

本稿は、これまで後期の西田における「身体」と「自然」の関係を考察してきた。まず、「客観」に対応する身体性として「歴史的身体」が存在する。そして、その身体性を可能とし、その身体性によって見いだされる自然が「記号的」な「必然的自然」であることを見た。他方で、「主観」に対応する「生物的身体」には、「自然」がイメージを生産する衝動的な「自然」として現れることを見た。そして、その両者を支えるものとして、〈垂直的〉な「衝動」が存在し、そこには『哲学論文集第三』以降「構想力としての自然」が暗示されており、そこから三木の議論との関係性を探れることを見た。

これらを踏まえて、本稿のはじめに確認した論文「人間的存在」の次の一文に戻ろう。

> [……] ドストイェフスキィは人間をその極限において見た。その消失点 (vanishing point) との関係において見たのである。ニーチェも人間をその極限において見た。しかし彼はドストイェフスキィと反対の立場から見たのである。上に論じた如く、作られて作るものの頂点として、人間は絶対の障壁に打ち当たる所に、真の人間があるのである。そこにはただ二つの途がある。ラスコーリニコフの如く神なくして生きるかという娼婦ソーニャに頭を下げて新しい生命に入るか、然らざれば「悪霊」の中のキリロフの言う如き人神への途である。ニーチェの超人の理想は正にそれである。しかし私は思う、彼の永劫回帰の思想は、超人の立場から彼自身が自ら越えることのできない深谷に臨んだことを示すものでなかろうか。侏儒は言う、すべて真直ぐなものは偽である、すべて真なるものは曲がっている時そのものが円である、と。永劫回帰の立場からは、超人もいつかは侏儒とならなければなるまい。月高く犬は吠ゆ (Vom Gesicht und Rätsel)。(9-55)

ここでは「犬」と「人間」が共に直接する不可能性としての「自然」が論じられている。そのような「自

然」とは、記号的な方向へと踏みすぎることができないものでありながら、同時に距離を取ることを求められるものであった。

そして、この文章が興味深い理由は、西田の体系からは、「犬」の声が後期西田の二種類の「自然」とは異なる「自然」である点にある。「犬」の声は人間のみが可能な記号的な把握とは異なる。だが、自然の持つ「過去未来が同時存在的」な領野へと通路を持つことができないという動物の特性とは異なり、「犬」は永遠性を告げ知らせるものとして提示されている。それは、衝動的な自然と記号的な自然とは異なる「自然」を開示するものと言えるのではないか。

つまり、西田がここで「犬」に託したものとは、本稿がみた二つの自然と異なる「自然」であり、それは中期の自己限定する「絶対無」もしくは「永遠の今」そのものではないだろうか。「犬」は意味と無意味の枠外において、永遠性を告げ知らせる。そして、ここに私たちは後期への中期の明確な連続を見いだすことが出来るだろう。つまり、犬は絶対無において鳴くのである。

註

1）引用に関しては旧版『西田幾多郎全集』、岩波書店（第三版、1978-79）より行い、（巻数 - 頁数）というかたちで本文中に付記する。なお、引用は一部、表現を現代的に改めている。

2）西田の哲学の時期区分は諸説あるが、本稿は松丸の研究「西田哲学の時期区分説」(1987) で報告されている柳田謙十郎の三期説を採用する。すなわち、前期は『働くものから見るものへ』(1927) の前編まで、中期は『働くものから見るものへ』の後編から『無の自覚的限定』(1932)、後期は『哲学の根本問題』(1933) から『哲学論文集 第七』(1946) まで、である。

3）たとえば、戸坂は「博士 [西田] の「無」の立場からは、多分哲学的な諸問題・諸関係の意義の解釈は出来るだろうが、哲学的であろうとなかろうと、現実の問題は、実際問題は、こういう形而上学的な解釈の立場と方法とでは解決出来るものではない [……]」と述べている (戸坂潤、『戸坂潤著作集』（第二巻）、1966、p. 349)。この論点に関しては、板橋勇仁『歴史的現実と西田哲学　絶対的論理主義とは何か』が詳しく論じている。

4）ここで、「過去未来が同時存在的」な領野を〈現にはないもの〉の領野として本稿が提示する理由は、西田自身が〈現にあった〉過去、〈現に起こるであろう〉未来を踏み越えるかたちで、しばしばこの語を使用するためである。

5）ここで、これまで扱ってきた『哲学論文集 第一』などではなく、『哲学論文集 第七』の文章を扱う理由は、次の二点である。一点目に、筆者の意見では、一点目に道具と身体に関する論点は、『哲学論文集 第一』移行、変更が見られないこと。そして、『哲学論文集 第七』の記述が、もっとも簡潔なかたちで行われており、おそらく要点が明確となると思われること、である。

参考文献

西田幾多郎『西田幾多郎全集』、岩波書店、1978
板橋勇仁『歴史的現実と西田哲学』、法政大学出版局、2008
白井雅人「神なき時代の宗教――後期西田哲学における宗教の問題――」、『国際哲学研究』（第三号）、2013、東洋大学
杉本耕一『西田哲学と歴史的世界』、京都大学学術出版会、2013
田中潤一『西田哲学における知識論の研究』、ナカニシヤ出版、2012
戸坂潤『戸坂潤著作集』、形相書房、1966-1967
三木清『三木清著作集』、岩波書店、1986

務台理作『西田哲学』、クレス出版、1949
森野雄介「物は衝動する」、『西田哲学会年報』（十三号）、2015
田辺元『田辺元全集』第六巻、筑摩書房、1963、p. 202

A Dog and Absolute Nothingness
Body and Nature in the Philosophy of Kitarô Nishida in His Later Years

Yusuke MORINO

Abstract:

The purpose of this article is to elucidate the relationship between the body and nature in the later philosophy of Kitarô Nishida. In his later article entitled “Human Existence,” the relationship between body and nature appears with a discussion on a “Dog.” With this as a starting point, this article explores the relationship between nature and the body in Nishida’s later philosophy.

First, this article focuses on “nature.” The reason is that Nishida reconstructs his middle main concept of “the self-determination of eternal-now” as nature.

Also, we consider the differences between his middle philosophy and later one on this point.

Then, we consider the duality of the concept and the body. As an objective, Nishida proposes “body” as the concept of “historical body” and “nature” as semiotic “nature.” As subjective, he proposes body as the concept of “biological body” and nature as impulsive “nature.” In this point, we concern these two structures of “nature” and “body” in detail.

Finally, this article reconsiders the relationship between “Dog” and nature in the article entitled “Human Existence.”